

伝杉原宗伊筆「正徹詠草切」をめぐるつて

稲田利徳

一

平成二年五月、「和歌史研究会会報」(第九十七号)に、梅沢記念館所蔵の古筆手鑑『あけぼの』収載の正徹詠草の古筆切に関し、「伝宗伊筆『正徹詠草切』について」という拙稿を公表した。

その検討結果、この詠草切五首のうち、三首は家集「草根集」に見出されるが、他の二首は正徹の新出和歌と認定してよいこと、また、これは正徹が永享五年(一四三三)、あるいはそれに近い頃に詠出していた、独吟詠歌の手控的な詠草の断簡の可能性が強いことなどを提示し、ただ、もとの詠草がどの程度まとまった資料であったかの想定は難しいことも申し添えておいた。

その後、この拙稿を目にとめられた、田中登、杉谷寿郎の両氏から相次いで、先の詠草切のつれと思われる古筆切のコピーを数葉送っていただいた。長年にわたり、古筆切の収集、検討を持続されている、田中、杉谷両氏からの資料提供は、まことにありがたく、先の「あけぼの」収載の二葉も含め、伝杉原宗伊筆の「正徹詠草切」に関し、ここに改めて再検討を加えてみたい。

二

以下、伝宗伊筆「正徹詠草切」の断簡六枚を翻刻・紹介するが、古筆切を四角に囲み、便宜上、その歌の上に通し番号を付しておく。

(断簡I)

(1)	貞恋 しかまたのほるを舟のくるしきや人ハかち路にかゝる 対橋問昔 川浪
(2)	えやハいふそこらむかしをしる花の名にこそたてれ 蛩随風過 軒の立花
(3)	色みえぬ風の心ももえわたる思ひをつけてゆく蛩かな 疎屋夕顔
(4)	はてしなき宮もかハラぬうき世とやわら屋にかゝる夕 孤夢易驚 かほの花
(5)	なく涙ふるき世かけておとろけハみし人もなき関の松 桜 かせ

この(断簡I)は、拙稿ですでに検討したもの。即ち『古筆手鑑大成』(第七巻)に複製して収められた、梅沢記念館所蔵の古筆手鑑「あけぼの(下)」に貼付されている。右肩に「相原伊賀守宗伊」という極札がある。『古筆手鑑大成』の解説(杉谷寿郎氏担当)によると、縦二十六糎、横十六・四糎の斐楮まじりの料紙の古筆切で、室町時代の書

写とし、次のような解題が加えられている。

一本断簡の歌は、正徹(二三八一—一四五九)の家集『草根集』の日次本系に、「しかまかた」(『私家集大成』の正徹IV四五二六)・「えやはいふ」(同三二六二)・「はてしなき」(同三二三五)の歌が見えるので、正徹の歌集とみてよい。しかるに、この日次本系はもとより、それを部類化した類題本系にも、また他の正徹の家集類にもそのままの歌順ではみられない。なお精査を要するが、一種の正徹の歌集とみなしておきたい。^{註1)}

(断簡II)

- | | |
|------|---|
| (6) | 寄岡恋
すゑつるにかる、中かなしら露の契りそをかのかやか下
おれ |
| (7) | 寄玉恋
涙ゆへ玉まく袖はくすの葉にあらぬうらみに色かハリ
つ、 |
| (8) | 寄朝恋
朝手あらふたよりも先あふ事をいのるとなしにうち
思ひつ、 |
| (9) | 田家鳥
たちかへり鳴そ羽かくしつのおか百夜ハかりハもりし
かり田に |
| (10) | 寄風述懐
天地のうこくたくひやはならん六種にわけし風のすかた
は |
| (11) | 早春山 嘉吉四年
都まで春やたつらん朝日山か、れる西の山そかす
湊春雨
まぬ |

この(断簡II)は、田中登氏の御所蔵で、田中氏から送られたコピーによって翻刻した。「杉原殿宗伊 寄岡恋」の極札がある。料紙の大

きさは、縦二十五・七糎、横二十糎。

(断簡III)

- | | |
|------|--|
| (12) | 寄月恋
見すもあらぬ袖になかれをせく月や思なくさむひま
をしるらん |
| (13) | 寄鏡恋
恋そうきか、ミの箱にゐるちりの中の心ハくもりなき
身を |
| (14) | 寄紐恋
かはらすハ下裳のひものむすひめもくつらむ物をとく夜
ハそなき |

この(断簡III)は、藤井隆氏の御所蔵のもので、田中氏から送られたコピーによって翻刻した。「杉原宗伊」の極札があるとのこと。料紙は、縦二十五・五糎、横九・七糎。

(断簡IV)

- | | |
|------|---------------------------------------|
| (15) | 暮春
む月たつ子の日の小松二葉より名たゝる春のかさし
とそみる |
| (16) | 更衣
春ハけふくれゆく空の夕かすミ思ひきえてやしたひわふ
らん |

この(断簡IV)は、長谷寺所蔵の古筆手鑑に貼付されているもので、右肩に「杉原宗伊 暮月たつ」の琴山印の極札がある。杉谷寿郎氏が所在の教示を受け、送られたコピーによって翻刻した。

(断簡 V)

(17) 寒松
空をまて嵐もさむき霜の松あたゝかにこそ雪は
氷上雪 つもらめ
信濃路や雪かき分てゆく野へを思へハこほるすハの
餘花 水うみ

(18) この(断簡 V)は、中島家所蔵の古筆手鑑に貼付されているもので、右肩に「杉原伊賀守賢盛法名宗伊」の極札がある。杉谷氏から所在の教示を受け、送られたコピーで翻刻した。

(断簡 VI)

暁鶏
世にいてんその暁の鳥もさそ八声をつけて法をきか
まし

この(断簡 VI)は、星名家所蔵の古筆手鑑(二号)に貼付されているもので、右肩に「杉原伊賀守賢盛法名宗伊」という極札がある。杉谷氏から所在の教示を受け、氏から送られたコピーで翻刻した。

以上紹介した古筆切断簡六枚は、次の根拠によって、すべてつれとみなされる。

(1) いずれの断簡も伝称筆者を杉原宗伊と鑑定しているように(その当

否は別として)、その筆跡は同筆とみなしてよいこと。

(2) 歌題を歌本文より三〜四字下げて記し、また、和歌一首を行詰まりのためか、第五句の一部を末尾の左側に記す書写態度が共通すること(例外は(3)番のみ)。

(3) 断簡 I II III の料紙の縦の長さがほぼ一致すること(断簡 IV VI は、原寸大のコピーでないので不明)。

(4) 断簡 VI は一首、断簡 III は恋歌三首だけなので、前後の部分が不明だが、他の断簡は、歌題からみても、四季・恋・雑の歌が混入しており、すっきりした類題別の配列になっていないという歌稿の性格も一致すること。

(5) 断簡 I II III には、正徹の家集「草根集」と一致する歌が見出されること。

三

すでに『古筆手鑑大成』の解題や拙稿で指摘したように、(断簡 I)の五首のうち「草根集」に三首の一致歌が見出されたが、ここで新しく紹介した(断簡 II ~ VI)の古筆切が、つれであるとすれば、他の断簡にも正徹の現存する歌集と一致歌が見出されてもよいはずである。

ここで、正徹の家集「草根集」をはじめ、「永享五年詠草」(天理図書館)、「永享六年詠草」(常徳寺)、「永享九年詠草」(大東急記念文庫)などの各年時詠草、さらに新出歌を含む「月草」(陽明文庫)、「恋歌一軸」(正宗文庫旧蔵など)はじめ、これまで収集した、正徹の自筆懐紙・短冊類など、正徹の全歌と先の断簡の歌との一致歌を調査してみた。

その結果、(断簡 I)の三首の一致歌のほか、IIに三首、IIIに一首、あわせて七首見出された。ただし、IV VI にはなかった。

ここで一致歌の本文を、出典とともに列挙しておく。七首の一致歌のうち、二首は二つの出典をもつ。傍線部分が、断簡の歌と相違する本文である。

眞恋

(1) しかまかたのほるを舟のくるしきや人ハかち路にかゝる川浪

負恋

しかまかたのほる小舟のくるしきや人ハかち、にかゝる川なみ

眞恋

しかまかたのほるを舟もくるしきは人ハかち、にかゝる川なみ

(永享五年詠草・一〇八)

対橋問昔

(2) えやハいふそこらむかしをしる花の名にこそたてれ軒の立花

対橋問昔

えやはいふそこらむかしをしる花の名にこそたてれ軒の橋

(草根集・卷四・三二六二)

疎屋夕顔

(4) はてしなき宮もかハラぬうき世とやわら屋にかゝる夕かほの花

疎屋夕顔

はてしなき宮もかハラぬうき世とやわら屋にかゝる夕かほの花

(草根集・卷四・三三三五)

寄玉恋

(7) 涙ゆへ玉まく袖ハくすの葉にあらぬうらみに色かハリつゝ、

寄玉恋

涙ゆへ玉まく袖は|薦の葉にあらぬ恨に色かはりつゝ、

(恋歌一軸・一四七)

寄朝恋

(8) 朝手あらふたよりも先あふ事をいのるとなしにうち思ひつゝ、

寄朝恋

朝てあらふたよりも先逢事を祈となしにうち思ひつゝ、

寄朝恋

朝てあらふたよりも先逢ことをいのるとなしにうち思ひつゝ、

(恋歌一軸・二四二)

早春山

(11) 都まで春やたつらん朝日かけかゝれる西の山そかすまぬ

早春山

都まで春やたつらむ朝日かけかゝれる西の山そかすまぬ

(草根集・卷四・二六五二)

寄鏡恋

(13) 恋そうきか、ミの箱にゐるちりの中の心ハくもりなき身を

寄鏡恋

恋そうきか、みの箱にゐる塵の中の心はくもりなき身を

(草根集・卷六・四六六六)

この七首の正徹歌との一致によって、特に断簡ⅠⅡⅢが「正徹詠草切」である可能性が強くなったが、一致歌を見出せなかった、他の十二首が、はたして正徹の新出歌とみなしてよいものか問題である。特に、断簡ⅣⅤⅥには一致歌が見出されなかったため、慎重に処理せねばならない。

そこで、念のため、正徹以外の歌人の詠歌の混入、あるいは他の歌人の詠草切の可能性のあることも考慮に入れ、『新編国歌大観』(巻一―八)、『私家集大成』(全七卷)などはじめ、あれこれの和歌索引の類を繰ってみたが、他の歌集に一致歌は見出せなかった。

その点、断簡 I II III の (3) (5) (6) (9) (10) (12) (14) の七首は正徹の新出歌とみなしてよく、また、断簡 IV V VI の (15) (16) (17) (18) (19) の五首も、一―二首の断簡だったため、たまたま正徹の歌集と一致歌が見出せなかっただけのことで、後述するように、歌の内容からみても、正徹の歌である可能性が濃厚となる。

さてこの六枚の断簡が「正徹詠草切」であるとの可能性が強くなったが、現存する正徹の歌集、詠草類に、これと同じ歌題配列を有するものは見出せない。はたしてこの詠草はいかなる性格の詠草の断簡なのであろうか。

ここで一致した七首の出典を調査してみると、一つの傾向のあることに気付く。それは「恋歌一軸」だけに見出される一首のほかは、「草根集」の巻四と三首、巻六と三首と、全十五巻のうち、ある特定の巻に集中していることである。「草根集」の巻四・五・六および巻十五は、他の巻の日次詠草や定数歌と相違し、歌題と和歌だけが記されている、いわゆる詠草年代不記の巻である。

この詠草年代不記の巻に関しては、すでに拙著『正徹の研究』（第二編第二章第四節）で詳論したので、ここではその結論のみを、巻四・五・六について摘記しておく。

(1) 巻四・五・六には、正徹五十歳頃から七十歳頃までの詠歌を収めてあり、「草根集」の他の巻に日次詠草が存在しない、永享七―十二年、嘉吉、文安年間の歌もかなり収録されていること。

(2) 巻四は春・夏、巻五は秋・冬、巻六は恋・雑と、一応、四季・恋・雑に部類されてはいるが、その内部の歌題は完全な類題配列になっていない。これは、ある特定年時のものが、あるまとまりをもって類題配列されているためであらうこと。

(3) 巻四・五・六には、正徹の、広い意味での独吟詠歌が収められているが、独吟歌をすべて収めたものではなく、かなり厳選された、いわば「独吟撰集」とでも称すべき性格を有すること。

他方、二首の一致歌のあった「恋歌一軸」に関して、拙著『正徹の研究』（第三編第一章第六節）で詳論したので、その結論のみを摘記しておく。

(1) 正徹の恋歌だけを歌題分類した詠草であるが、「草根集」とは一一五首一致、このうち巻六と八五首一致、新出歌は二〇五首。

(2) 詠草年代範囲は、永享頃から康正頃のものを中心になっていること。

(3) 詠歌場所のわかる歌では、三井寺関係が多いこと。

以上の巻四・五・六や「恋歌一軸」の詠歌の性格、収録年代範囲と、「正徹詠草切」の七首の一致歌とを勘案すると、この古筆切の性格が、ほぼ想定されてくる。

即ち、まず「正徹詠草切」は正徹の独吟歌を収録した詠草であらうこと。そのことは巻四、巻六にのみ一致歌が集中し、他の巻の日次詠歌と一致しないことや、「恋歌一軸」も独吟歌を収めた巻六と八五首も一致するように、独吟歌が相当数収められているので、一致した二首も独吟歌とみなされること。また(1)の歌は「永享五年詠草」にも見出されるが、この詠草も、公的な歌会歌と独吟詠歌をすべて取り込んだ詠草なので、一致歌があっても矛盾とはいえない。

さらに歌題に着目して断簡をみると、I には、恋・夏・雑・春、II には、恋・雑・春、IV には冬・春といったように、歌題が部類配列されていないが、さらに仔細にみると、(2) (3) (4) のように四字結題の夏の歌、(6) (7) (8) や (12) (13) (14) の寄物恋などといったまとまりもある。これはいずれも三首に限られているところからみると、懐紙に独吟歌三首を詠じ、それをそのまま記入したものではなからうか。

これらを勘案すると、「正徹詠草切」は、独吟詠歌の手控的な詠草だとした、先の拙稿の推定が一段と確かなものとならう。

さらに、これらの古筆切の歌に、巻四・六と一致歌がある一方、一致しないもののあることは、巻四・五・六を「独吟撰集」とした拙著の理解と見事に符合してくる。

つまり、巻四・五・六は、「正徹詠草切」の原本にあたるような独吟詠歌の手控的な詠草を対象にして秀歌を撰抄してなったということでもある。

ところで、この古筆切の原「正徹詠草」は、どの程度まとまった資料で、その詠歌年時の範囲はどのくらいであったろうか。

詠歌年時の推測できるのは(1)の歌で、「永享五年詠草」と一致することから、ほぼ永享五年頃の詠歌とみなされる。また、断簡IIの(11)の「春山」の歌題の下の「嘉吉四年」とある注記は、この詠草の性格に貴重な示唆を与えるものとして注意される。

多分これは、(11)が「早春山」という歌題からみて、この歌が嘉吉四年の年頭頃に詠出されたことを示したもので、それに続く歌は、その年に詠じた独吟詠歌だったのではなからうか。そして「正徹詠草」には、各年時の最初の歌に、このような年時注記のメモがなされていた可能性がある。

すると、原「正徹詠草」は永享五年や嘉吉四年の独吟歌を含んだ、かなりまとまった詠草の可能性がでてくるが、これまた、巻四・五・六の収録年代範囲と符合する。

以上のように、断簡として現存する「正徹詠草切」は、元来、正徹が独吟歌を詠じた際、次々に記していった、独吟詠歌の手控的な詠草であったろうこと、その詠歌年時範囲は、少なくとも、永享五年(一四三三)前後頃から嘉吉四年(一四四四)前後頃までにわたること、そして、この詠草は、「草根集」の巻四・五・六の編纂の際、撰歌対象になった可能性もあろうことなどを考証してきた。

四

ところで断簡IV・V・VIには、現存する正徹歌と一致するものがなく、はたして一連のつれなのか、また、正徹の新出歌とみなしてよいものか、不安も存する。

これら三枚の断簡も「正徹詠草切」のつれであろうことの根拠は、すでに先述したが、それはあくまで外形的な面からのものだった。それを受けて、ここではさらに、数首の内容を検討し、それらの歌が、正徹のものとして、違和感のないことを指摘しておきたい。

(断簡IV)の(15)番歌の

む月たつ子の日の小松二葉より名だゝる春のかざしとぞみる
は、正月の子の日の二葉の小松を「春のかざし」とみたものだが、ここでの「む月たつ」の措辞は、「万葉集」には二首ほどみえるが、二十一代集に一首もないのをはじめ、他にも容易に見出しがたい珍しいものである。ところが、「草根集」には、
年ぞよき神の生しむ月立けふの一日の初ねにぞあふ
(巻三・二三八二)

とみえ、しかも両歌とも初子の日とかかわって使用されている点に共通性がある。

(断簡V)の(17)番歌

寒松

空をまで嵐もさむき霜の松あた、かにこそ雪はつもらめ
の「あたたかなり」の形容動詞は、二十一代集に一首も使用例がないほか、他の歌集にもあまり用例を見出せない、和歌においての稀少語彙である。ところが「草根集」には、

寒松

松のいろよ夏は涼しく冬の葉に雪つもらねどあた、かにみゆ

朝寒松

雪ふらばあた、かならむ松のはのことはりしらぬ霜の朝明

(巻十五・一〇九九三)

と二首みえ、しかも「寒松」の歌題で「雪」との関連で使用されている。まさしく(17)番歌の措辞と発想は、この二首と類似し、正徹の得意とする発想であったことがみとれると同時に、(17)も正徹歌の可能性

が強くなろう。

また(断簡VI)の(19)番歌の

暁鷄

世にいでんその暁の鳥もさぞ八声をつけて法をきかまし

の「世にいでん」の措辞も、二十一代集にみえないほか、他の歌集にもめつたに見出せない珍しいものである。この「世にいでん」は歌の内容からみて、釈迦の出現を意味するが、「草根集」には、

暁更聞鶏

世にいでん天津光に鳥の声其暁の月をしぞおもふ

(巻十四・一〇三三)

と、措辞、発想も近似する歌が見出される。

以上のように、先に触れた断簡IV VIが、I II IIIとつれであるとの外形的な根拠とあわせ考えるとき、やはり、これらの歌は、正徹の歌とみなしてよく、一致歌がなかったのは、断簡が一―二首だけのものだったためによるのであろう。

なお、断簡Iの新出歌の(3)「螢随風過」と(5)「孤夢易驚」の二首も、歌風からみて正徹らしい手法が窺えることについては、先の拙稿で触れたので、ここでは割愛する。

この一連の断簡の筆者を、すべて杉原宗伊とするが、この人物の筆跡について一言しておく。

杉原宗伊(応永二十五年―文明十七年)は、俗名は賢盛、著名な連歌作者であり、歌人としても活躍したが、現存する自筆短冊・懐紙類は少ない。短冊模刻本「眺望集」には「暮春」歌題の短冊一枚を掲載している。この他、書陵部に文明十五年に詠じた自筆の百首歌が現存し、^{註3}国文学研究資料館には、伝宗伊自筆の「日吉社奉納和歌」なども存するが、^{註4}古筆切の原物に直接当たっていないので、宗伊筆と判定してよいか断定はひかえない。

もし、宗伊の筆跡とすれば、彼は正徹と交友もあったので(「草根集」巻十一、享徳二年八月三日の条など)、こういった性格の詠草を転写する機会はありえたであらう。

以上、伝宗伊筆とされる断簡六枚が一連のつれであらうことを検証、それは、少なくとも永享五年前後頃から嘉吉四年前後頃にわたる、正徹の独吟詠歌を収めた手控え的な詠草の古筆切であらうと推定した。

この古筆切の出現は、単に正徹の新出歌が十二首追加できたというだけでなく、正徹の歌稿に、かつてある程度まとまった独吟歌の手控え的な詠草の存在したこと、それは同時に、巻四・五・六などの詠歌年代不記の巻を「独吟撰集」とでも称すべきものとした、以前の私見を一段と明確にさせることにもなった。その意味で、この断簡の出現の意義は大きく、今後、さらにつれが発見されることを期待したい。

注

- (1) 『古筆手鑑大成』の翻刻では、(4)の「宮」を「色」(『私家集大成』も同じ)と、(5)の「閨」を「園」としているが、各々に誤刻であることは、拙稿で触れておいた。
- (2) 『草根集』は『私家集大成』(第五巻)による。
- (3) 『永享五年詠草』は『私家集大成』(第五巻)による。
- (4) 『私家集大成』は「宮」を「色」と誤刻しているが、正して引用した。
- (5) 『恋歌一軸』は、ノートルダム滑心女子大学古典叢書刊行会の『草根集四』による。
- (6) 『私家集大成』は「か、み」を「かたみ」と誤刻するが正して引用した。
- (7) 拙稿で「孤夢易驚」と同じ歌題は、「草根集」には見出せないとしたのは、調査不足で、田中新一氏から私信で、他にも五一九八、九九〇九番歌にみえることを御教示いただいた。その他にも六四七〇にも同歌題がある。

(8) この資料は、小池一行氏「杉原宗伊自筆『百首和歌詠草』について」(書陵部紀要、第28号、昭和52年3月)に紹介がある。

(9) この資料は、井上宗雄氏「室町期和歌資料の翻刻と解説」(国文学研究資料館文献資料部『調査研究報告』第5号、昭和59年3月)に紹介されているが、井上氏は「宗伊の筆跡に似るが、自筆とは断定できない」とされる。

〔付記〕古筆切の所在とそのコピーを送ってください、任意に利用することを勧められた、田中登、杉谷寿郎の両氏及び古筆切所蔵者藤井隆氏に、各々に厚くお礼を申し上げます。

(平成三年七月十五日受理)